

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520685

 研究課題名（和文）中世東北地方における板碑造立の展開と歴史的景観の復元に関する  
史料学的研究

 研究課題名（英文）A study on the development of the medieval stone monuments erected  
for the repose of a dead person's spirit(itabi 板碑) and the  
restoration of the medieval landscape in Tohoku Region(東北地方), grounded to make the list of the historiographical materials

研究代表者

七海 雅人 (NANAMI MASATO)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：00405888

研究成果の概要（和文）：本研究は、中世東北地方の地域社会を分析する上で重要な史料である板碑（石造供養塔）を取り上げ、また文献史料の集成をおこなうことにより、鎌倉・南北朝時代の東北地方の歴史的な位置づけ・社会の特質を考えるための基盤づくりを課題とした。松島雄島海底板碑の採集と整理、白河庄・石川庄の板碑の集成と紹介、「中世奥羽史料史料目録」の作成に重点をおいた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to make the foundation to research the character of the local society in Tohoku Region(東北地方) between the Kamakura period and the period of the Northern and Southern Dynasties. So, I have researched the medieval stone monuments erected for the repose of a dead person's spirit (itabi 板碑), because the itabi is the important historical materials to study the medieval local society. Moreover, I have collected the paleography in aforesaid periods. What I have stressed on is to discover and report the many itabis from the bottom of the sea, the small island Oshima(雄島) around at Matushima(松島), collect the itabis in Shirakawa(白河) and Ishikawa(石川) private estates, and make the list of the medieval documents relation to Tohoku Region.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：板碑・松島・白河庄・石川庄・中世奥羽地域史・中世武士団

## 1. 研究開始当初の背景

中世東北地方に関する研究は、北方史の一環という位置付け・性格などを模索しながら、1980年代以降急速に進展した分野であり、中央の政治制度史（朝廷・幕府）を主軸とする

一国的・単一的な歴史認識を相対化し、東アジア史という広い視野から日本列島の多様な地域的歴史像を見直すという研究視角の中で大きな役割を担ってきた。その基礎的な歴史認識の枠組みや基本事実の確定について

ては、小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』(東京大学出版会、1978年)、伊藤喜良『中世国家と東国・奥羽』(校倉書房、1999年)、入間田宣夫『北日本中世社会史論』(吉川弘文館、2005年)などがあげられる。またこの間、重要な遺跡の発掘調査もあいつぎ、考古学的な知見にもとづく歴史的景観の復元に関しても、より精度の高い研究成果がまとめられるようになった。その到達点の一つとして、飯村均『中世奥羽のムラとマチ』(東京大学出版会、2009年)がある。

したがって、これらの先行研究をふまえた上で、次なる研究課題を見通せば、地域における人間活動の具体的な様相が社会の歴史的展開とどのように関わっているのか、またその際の東北地方固有の歴史的な特性はどこに求められるのか、という問題が設定できるだろう。

その際、かかる問題に取りくむ題材として注目したいのが、中世の石造供養塔の一種である板碑である。東北地方における板碑研究の現状に関しては、大石直正・川崎利夫編『中世奥羽と板碑の世界』(高志書院、2001年)にまとめられているが、碑面における文字列情報(銘文)が豊富であり、また造立年代や造立地点に傾向・特徴が見られるなど、上記課題に取り組むための格好の史料と評価することができる。本研究の代表者七海雅人は、宮城県・福島県を中心に在地領主層の動向と、彼らが造立した板碑の研究を進めてきた(「鎌倉幕府と奥州」柳原敏昭・飯村均編『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院、2001年)、『石川町史 第3巻資料編I 考古・古代・中世』(福島県石川町、2006年)など。また、日本三景の一つに数えられる松島の歴史的景観の復元にも関心を寄せ(「鎌倉・南北朝時代の松島—基礎的事項の確認」入間田宣夫編『東北中世史の研究 下巻』高志書院、2005年)など、瑞巖寺(宮城県松島町)と協力しながら、中世の霊場として知られる松島の「雄島」という小島の周辺海底を探索し、島から海中へ落下した板碑の破片を引きあげ、その整理・分析を進めてきた。

## 2. 研究の目的

本研究では、つぎの三点を課題として設定した。

(1)【多賀国府近郊の歴史的景観の復元と松島雄島海底板碑群の研究】中世多賀国府(宮城県仙台市東部～塩竈市)に関する研究は、豊かな考古学的成果に導かれ、大石直正・入間田宣夫編『よみがえる中世 みちのくの都多賀城・松島』(平凡社、1992年)にまとめられた。しかしその後、『仙台市史 特別編5 板碑』(仙台市、1998年)など新しい史料集の整備が進められるとともに、新発見の板碑も数多く検出・報告されている。

そこで、仙台湾沿岸から石巻湾沿岸にかけての板碑分布の再整理をおこない、文献史料の分析と総合することによって、鎌倉・南北朝時代の多賀国府近郊に関する歴史的景観の新たな復元をこころみる。

とくに、宮城県松島町雄島の周辺海底から引きあげている板碑(破片)の整理・分析作業を重点的に実施し、中世松島に関する新知見を提示する。

また、20点以上の新発見板碑が報告されている東松島市(中世では深谷保の範囲に含まれる)についても、板碑の調査を悉皆的に実施する。そして、これら板碑群の造立主体に比定できる在地領主長江氏の動向について整理をおこない、深谷保の歴史的景観を復元するための資料を集成する。

(2)【白河庄・石川庄の歴史的景観の復元と板碑の研究】福島県の南部一帯は、多賀国府とならんで中世陸奥国の重要な政治的拠点となった場所である。従来その研究は、白河結城氏・石川氏に関する文献史料を中心に進められてきた。

また、この地域は、多数の板碑が分布していることでも知られている。しかし、この板碑全体を統一的な計画にもとづいて調査・分析し、文献史料の成果と合わせて考察をおこなうというところみは、いまだなされてはいない。そこで、陸路・河川交通・領主居館のあり方などに注意をはらいながら、白河庄・石川庄の範囲に即して、あらためて悉皆的な板碑調査を実施し、整理・分析をおこなう。二つの荘園の歴史的景観を復元した上で比較検討することにより、鎌倉・南北朝時代の白河結城氏・石川氏の動向について新たな知見を提示する。

(3)【中世奥羽史料目録の作成と奥羽在地領主層の地域的展開に関する研究】中世東北地方の研究を進める上で障壁となっている大きな要因に、その全体像を俯瞰できるような史料目録がいまだ整備されていない点を指摘することができる。そこで、文献史料と板碑銘文などの金石文史料を合わせた総合的な史料目録(データベース)を作成する必要がある。

想定する目録の史料収録範囲については、平泉藤原氏が滅亡する1189年から、室町時代に陸奥国南部の政治的求心軸として機能した篠川公方が滅亡する1440年までとし、これまで研究が手薄であった当該期東北地方の基本的な歴史事実の紹介に寄与したい。また、当該期在地領主層の動向を総合的に整理・分析することにより、中世東北地方内部の地域性や、日本列島社会の展開過程において彼ら在地領主層が果たした歴史的な役割について考察をおこなう。

さらに、上記史料目録の作成をとおして板碑に関する史料的な価値を確定し、他地域の

文化財保存のあり方に関する現状や、上記(1)(2)における研究成果をふまえて、地域の身近な文化財としての板碑の保存・活用のあり方を考える。

### 3. 研究の方法

(1)【板碑の調査】 現地における観察表の作成を中心とし、新出碑や重要碑については拓本・実測図の作成をおこなう。

①〔松島町雄島の調査〕 5月～7月にかけて現象する隔週午前中の最大干潮時に、干潟となった雄島の周辺海底へ降りて、島から落下した板碑を探り採集する。作業方法は、ウエダー・スーツ（胴付ゴム長）を着用し、ピンポールで干潟となった海底面を突き刺し、板碑を発見する。発見地については、測量計器を利用して地図上にポイントを落とす。発見した板碑は瑞巖寺宝物館へ搬入し、洗浄した上で真水に浸して脱塩作業をおこなう。

また毎週日曜日を板碑の調査・整理作業日にあて、研究協力者新野一浩の指導のもと、研究代表者七海雅人のゼミ大学院生・学部学生有志と例会活動（松島板碑研究会）を組織し、観察表・拓本・実測図などの作成を進める。

②〔東松島市の調査〕 東松島市教育委員会と連絡をとりながら、市内板碑ならびに隣接する石巻市河南地区の板碑について悉皆調査をおこなう。

③〔白河市・石川町・玉川村の調査〕 白河市・石川町教育委員会と連絡をとりながら、調査を実施する。白河市については自治体史を参照し、石川町・玉川村については『石川町の板碑』（石川町中央公民館編、1979年）、『玉川村の板碑』（岩谷浩光編、1985年）を参照し、板碑の所在調査と観察表の作成をおこなう。重要碑については、拓本・実測図の作成をおこなう。

(2)【中世奥羽史料目録の作成】 各種史料集・自治体史などを参照し、文書・記録・編纂物・金石文史料に関するデータを収集した上で、コンピュータ・ソフトによる仮目録を作成する。それをもとに、発給年・史料名・発給者・受給者・内容摘記・備考（人名・地名ほか）などの詳細項目を備えたデータベースの構築を目指す。データの収集調査については、東京大学史料編纂所が作成した写真帳・影写本・謄写本などを活用する。

(3)【歴史的景観の復元作業】 上記(1)(2)の調査・作業の成果をふまえて、多賀国府近郊・白河庄・石川庄の歴史的景観を復元し、その上で鎌倉・南北朝時代における津軽・多賀国府近郊・海道（福島県太平洋岸一帯）・白河方面各地域における武士団の動向を考察する。これにより、新たな中世東北地方の地域社会史像を提示し、研究フィールドにお

いて成果報告会を開き、文化財としての板碑の保存・活用などについて提言をおこなう。

### 4. 研究成果

#### (1)【板碑の調査と歴史的景観の復元作業】

①〔松島町雄島の調査〕 1年目は4月から8月にかけて7回、雄島周辺の海底調査を実施し、291点の板碑（破片を含む）を採集した。これにより、雄島の北端部にも板碑が造立されていたことを確認し、またはじめて瓔珞荘巖の一部が認められる破片を発見した。2年目は、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれにともなう大津波（東日本大震災）により雄島へ渡る橋（渡月橋）が崩落し、海底の様子・地形が大きく変化するという事態に直面した。また地盤沈下により干潮時の海面低下も鈍り、大きな余震も続いた。このため、昨年並みの調査を実施することは困難となった。そこで、ゴムボートを用いて4月から7月にかけて6回雄島へ渡り、簡便な調査を実施した。雄島内部の被災状況を確認し、196点の板碑（破片）を海底から採集した。中でも、「平孫犬丸」という人名が刻まれた板碑を発見したことは重要である。3年目は、昨年に続き4月から7月にかけて10回ゴムボートで雄島へ渡り、周辺海底における板碑の分布調査と採集作業をおこなった。308点の板碑（破片）を採集した。

以上の作業により、本研究事業以前に採集していた板碑（破片）と合計して、2,123点の板碑（破片）を採集することができた。このうち、種子・銘文の刻まれたものは708点を数え、8点が接合に成功した。紀年銘は13世紀末から14世紀末の100年間におおよそおさまること、ラヤカの梵字（地藏をあらわす）を刻んだ50cm以下の小型板碑が多数確認できたこと、石材のほとんどは石巻方面から産出された井内石・雄勝石であること、雄島全域にわたり板碑が造立、または納められていたことなどが明らかとなり、霊場としての雄島の景観復元に関して新たな知見を提示することができた。

②〔東松島市の調査〕 調査地域が東日本大震災の甚大な被災地となってしまったため、被災状況を確認しながら板碑の所在調査をおこなうにとどまった。

また、震災で被災した宮城県石巻市の郷土史家・故勝倉元吉郎氏が遺した調査目録・拓本類をレスキューし（NPO法人宮城資料ネットの活動に参加）、その整理と内容確認を進めた結果、東松島市周辺の中世・近世石造物に関する資料を多数検出することができた。

③〔白河市・石川町の調査〕 白河庄については、白河市旧・大信村地区の建長8年（1256）銘板碑や泉崎村の磨崖板碑群など、板碑の所在・現状確認をおこなった。とくに

白河市旧・表郷村地区に関しては悉皆調査をおこない、白河の関に関連したランドマークである関山を基点としながら、中世の古道に即して板碑が個別に点在する歴史的景観の復元をおこなった。

石川庄については、『石川町の板碑』・『玉川村の板碑』刊行後に発見された板碑の調査をおこない、その成果をふまえて、データベースソフト（ファイルメーカー）を利用し、石川町・玉川村の板碑データベースを作成した。この成果をもとに、庄内における板碑の分布状況・銘文内容などを分析し、石川一族の展開の様相に関する私見を提示した。

(2)【中世奥羽史料の作成と南奥在地領主層の研究】

①〔中世奥羽史料目録（稿）の作成〕

データベースソフト（アクセス）を利用し、1189年から1440年にいたる東北地方に関する古文書を集成した。文書名・年月日・発給者・受給者・収録文書群名・所蔵先などの基本情報を入力したが、内容摘記を完成させるまでにはいたらず、暫定版となった。ただし、南北朝時代の範囲に関しては、古文書の翻刻作業をおこない、『南北朝遺文 東北編』として刊行することができた。

また、この目録を利用し、鎌倉・南北朝時代の多賀国府から海道（福島県浜通り地方）にいたる地域の様相について、阿武隈川の河川交通と在地領主層の動向を軸に復元をおこなった。その結果、当該地域における在地領主層の動向が、中世東北地方の政治史の展開を規定し得る要因として意義付けられることなどを提示することができた。

(3)【まとめと展望】

本研究により、鎌倉・南北朝時代の東北地方研究の基礎固めと、陸奥国南部における板碑の立つ歴史的景観の復元をおこなうことができた。とくに、宮城県松島町の雄島海底板碑群の調査を推進できた意義は大きい。

また、板碑の採集作業と、各種データの整理作業に関しては、東北学院大学の日本中世史ゼミ大学院生・学部生の協力を得ることができた。板碑の現地調査や拓本・実測図の作成、古文書のデータ整理など、彼らの学業生活の中において、本研究事業は有益な実習の場を提供できたのではないかと考えている。

ただし、その一方で、研究事業1年目の終わりに発生した東日本大震災により、研究計画を立てたフィールドが広範囲にわたり厳しい被災地となってしまったこと、また本研究代表者七海雅人自身が被災してしまい、研究体制の立て直しに長時間を要したことなどから、所期の計画を完全に達成するまでにはいたらず、研究内容・スケジュールの一部について変更を余儀なくされることが生じた。

よって、本研究事業が終了した後も、雄島

海地板碑群の資料化と東日本大震災の被災地における板碑の現況確認・調査を継続し、また中世奥羽史料目録のさらなる充実化に取り組んでいく。これにより、本研究事業の成果を適宜補充し、国民へ報告・還元することにつとめていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

①岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦「平泉出土文字資料の再検討2」（『平泉文化研究年報』13、2013年、67～76頁）、査読無

②新野一浩・七海雅人「松島町雄島周辺海底採集板碑の報告（一）」（『東北学院大学東北文化研究所紀要』44、2013年、81～124頁）、査読無

③七海雅人「東日本大震災宮城県沿岸部板碑の被災状況」（民衆宗教史研究会編『寺社と民衆』8、2012年、1～6頁）、査読無

④七海雅人「鎌倉御家人の入部と在地住人」（安達宏昭・河西晃祐編『講座東北の歴史 第1巻』清文堂、2012年、187～213頁）、査読無

⑤七海雅人「第2編5章2節 石川の板碑」（『石川町史 第1巻通史編1』福島県石川町、2012年、233～242頁）、査読無

⑥七海雅人「第3編3章 板碑」（『表郷村史 第2巻資料編』福島県白河市、2011年、389～410頁）、査読無

⑦七海雅人「鎌倉・南北朝時代の伊具郡」（東北学院大学アジア流域文化研究所編『アジア流域文化研究』VII、2011年、99～106頁）、査読無

⑧七海雅人「鎌倉時代の津軽平賀郡―曾我氏関係史料の基礎的考察―」（東北学院大学東北文化研究所編『古代中世の蝦夷世界』高志書院、2010年、257～284頁）、査読無

⑨七海雅人「平泉藤原氏・奥羽の武士団と中世武家政権論」（入間田宣夫編『兵たちの時代 I 兵たちの登場』高志書院、2010年、44～65頁）、査読無

〔学会発表〕（計5件）

①七海雅人「中世の宇多郡と阿武隈川下流域」（公開シンポジウム「歴史としての東日本大震災 in 新地町」、於・福島県新地町農業環境改善センター、2012年12月15日）

②七海雅人「『人々給絹日記』の基礎的考察」（平泉遺跡群出土文字資料検討会中間報告会、於・一関市一関文化センター、2012年11月11日）

③七海雅人「雄島海底板碑」（平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会、於・宮城県亘理町

立図書館、2010年12月11日)

④七海雅人「松島の板碑 ―雄島海底板碑の研究―」(東北学院大学中世史研究会第38回大会、於・岩手県一関市博物館、2010年11月13日)

⑤七海雅人「南部家文書所収曾我氏関係史料について」(東北中世史研究会・東北近世史研究会合同特別例会「南部家文書の世界」、於・宮城県仙台市戦災復興記念館、2010年7月18日)

〔図書〕(計1件)

①七海雅人・大石直正編『南北朝遺文 東北編第2巻』東京堂出版、2011年、全339頁

〔その他〕

ホームページ等

① 松島板碑研究会(代表:新野一浩・七海雅人)「東北学院大学博物館における雄島海底板碑群の展示」

(<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/facilities/museum/research04.html>)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

七海 雅人 (NANAMI MASATO)  
東北学院大学・文学部・教授  
研究者番号:00405888

### (2) 研究協力者

新野一浩 (NIINO KAZUHIRO)  
瑞巖寺・宝物館・学芸員